

書 評

森北出版発行

安部征雄, 小島紀徳, 遠山枉雄 編著 定価 1,600円

沙 漠 物 語

評 者 並 河 清*

Kiyoshi Namikawa

農に携わっているだけに、来世紀前半の食料資源が気がかりであり、沙漠も生産の場として、考え得るか否か一つの関心事である。最近深田祐介“最新東洋事情”（文芸春秋1994年7月号150～165頁）を読んでいたら、……昔は年に十回くらい黄砂が降ったんだけど、現在は年に二・三回くらいに減ったんですよ。つまり黄砂の原因の沙漠地方の緑化が進んでね、砂が舞わなくなった。……、と北京中国国際旅行社の人の言を引用していた。緑化には直接関係のない用務ではあったが、10余年前に2カ月滞在したためか、この記事に引かれ、標記の沙漠物語を読んだ。

内容的には、沙漠に水はあるか、利用の後に残されたもの、沙漠の水を生かす技術、水を作る、水と土と塩のコントロール、沙漠を緑に、地球環境と沙漠技術の7話からなっている。このように水と緑を育てる話を中心である。

沙漠によっては洪水があるが、降雨時期と土壌構造の関係で植物が育たないとか、沙漠の地下水の話、地下ダムのこと、人工降雨、南極の氷山を運ぶ可能性、空気中の湿気から水を取ること、淡水化、等の水の話が詳しく面白い。また文明発祥の地の一つとされ、文化の中心地であったメソポタミアの滅亡、レバノンに見られる人為的な森林の荒廃、アラル海の縮小、アメリカやオーストラリアの沙漠化と、幅広く乾燥地利用の跡を紹介している。また、門外漢にとって気の付かなかった塩類集積が印象に残り、沙漠を部分的に、短期的に使い捨てるのではなく、長期に亘った持続的な緑地化がいかに難しいかが判る。水や緑化について、地道な努力に加え、夢のような方法も紹介されている。それぞれに技術的には興味を引かれる事例であり、夢が現実のものになる日を期待したい。

核実験と沙漠環境、アスワンハイダム、沙漠での自然エネルギー（太陽光と風）、海の沙漠化（マングローブの伐採）等多方面に話題が及んでいる。また、現実に沙漠化は日々進んでおり、この沙漠化は乾燥地帯の人口増加に端を発している事例が多だけに、問題の改善、解決には社会、経済、政治などを含めた総合的な対応が不可欠、としている。それだけに、社会的、経済的、政治的背景にも重点を置いて企画していただければ、物語としてもっと興味深くなったのではないだろうか。これらについても、今後報告と提案を期待したい。

一話は第7話を除いて、6つの事項から成り立っている。通して読んでも良いし、何かの待ち時間等に短編読み切り物語集として読んでも、充分に応えてくれる著作である。

著者は沙漠学会の有志19名で、この内15名が企業に勤務の方達である。多くの項目からなり、しかも多人数で執筆されているが、読み合わせが十分に行われているためか、内容や文章のバランスもよく、適切な写真（本文中46とカラー口絵）や図（本文中37）も多く、理解しやすく執筆されている。物語の中から緑の沙漠を夢み、沙漠に地球環境に役立つ「工学」を作ろうとしている、或いは沙漠に入れ込んでいる人達の熱意が伝わってきたが、旗揚げを訴えている本との印象を持った。沙漠に関心のある人にとっては、一読の価値があり、地球環境に関心のある人にとっては読後時間をつぶされたとは思えないだろう。勿論、沙漠に無関心な人にとっても楽しい啓蒙の書である。

なお、著者に敬意を表し、「沙漠」なる文字ではなく「沙漠」を使用した。

* 京都大学農学部農業工学科教授
〒606-01 京都市左京区北白川追分町